

—まとめて出土した遺物—

今回の調査では、いくつかの平安時代(約1,100年前)および鎌倉時代(約700~800年前)の遺構から大量の土器が出土しました。これらの遺構は、溝や土坑、小穴と性格は異なります。このうち、①の溝と②の土坑からはそれぞれ30~40枚のかわらけが出土しました。①からは箸が見つかったことから、付近で宴会をした後、廃棄されたと考えられます。かわらけは割れやすい焼物のため、複数回使用したあとに廃棄する傾向にあったようです。また、①では白磁碗や青磁碗の輸入磁器も見つかっており、舶来品を手に入れるルートがあったことがうかがえます。くわえて、墨書土器も見つかっており、碗の裏の底に花押のような文字が書かれていました。

③は屋敷地内で見つかった土坑です。中心部に土器を固めて埋納していたことがうかがえます。出土したかわらけの状況から、埋納時は複数枚を重ねていたと考えられます。このようにかわらけの使用用途は日常使いから儀式までさまざま、当時の人々にとってはなくてはならないものであったと言えます。

また、④は③の付近にある小穴から見つかりました。これは地鎮のために小穴の中に杯を重ねて入れたもので、なかにはベンガラを塗った杯も含まれていました。

※人間が土を掘りくぼめてできたと考えられる穴の総称



①B4区 溝S20 ②B3区 土坑S6 ③A2区 土坑S73 ④A1区 小穴S71
①~③鎌倉時代 ④平安時代



そうぎょもんつきせいじわん
双魚紋付青磁碗(12世紀後半~13世紀)
中国からの舶来品で当時は高級品でした。



ぼくしょどき
墨書土器(白磁碗)(13世紀後半~14世紀)
文字や絵が書かれていることが多いですが、
これには花押(当時のサイン)が書かれています。

まとめ

今回の調査では、今まで愛荘町で発見されていなかった弥生時代の人々が生活していたと思われる建物が見つかりました。平成8~10年度の長野遺跡の調査で弥生時代の溝や遺物は見つかっていましたが、建物が見つかったのは今回が初めてです。

また、鎌倉時代の屋敷地では掘立柱建物や、井戸などのそれに伴う付帯施設を良好な状態で検出することができました。特に井戸に関しては、当時では珍しい石組の井戸を5基発見し、人々の生活の工夫を垣間見ることができました。

今回の調査成果は、主に弥生時代や中世の長野遺跡ほかおよび愛知川左岸地域をひもとくうえで貴重な成果となりました。

長野遺跡ほか発掘調査成果報告会資料

令和6年(2024年)12月8日(日) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



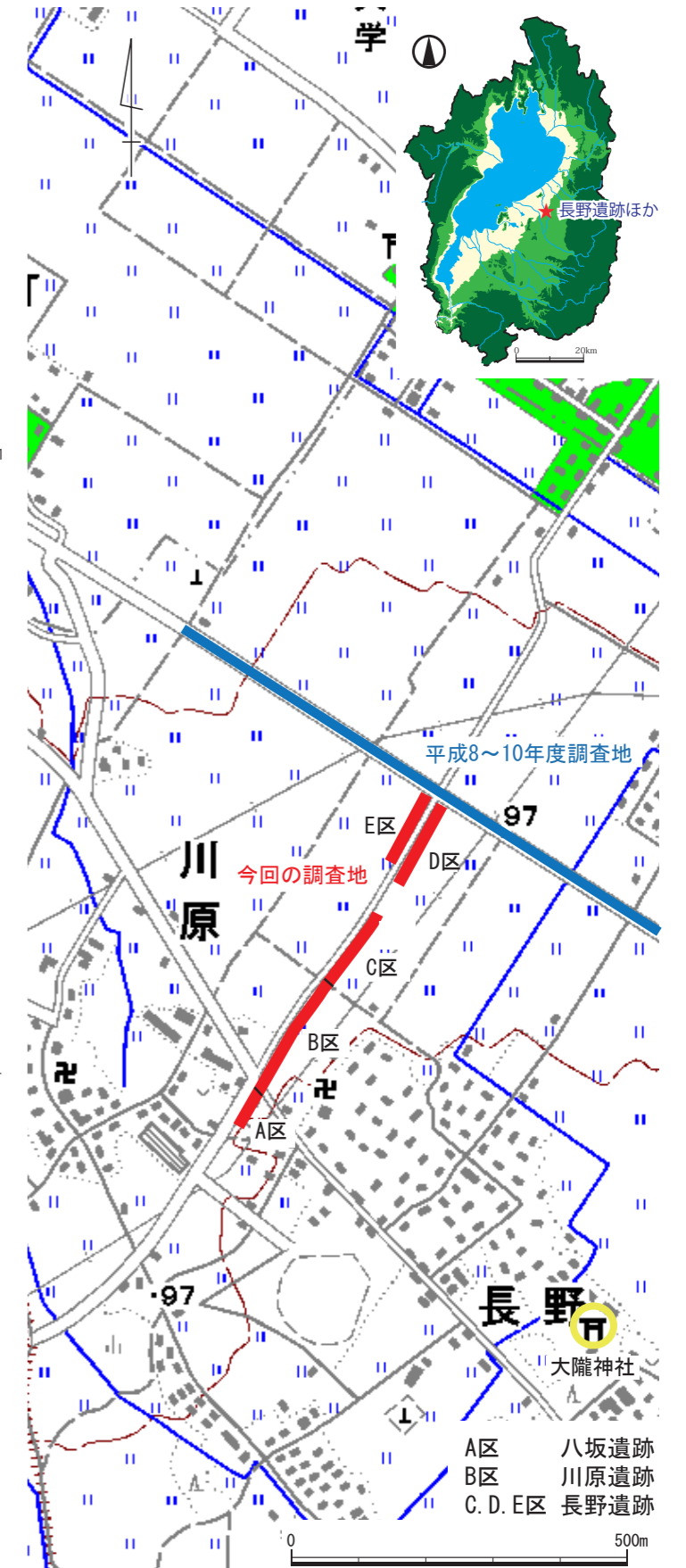
遺跡と調査の概要

遺跡の概要 今回の調査は、長野遺跡・川原遺跡・八坂遺跡の3つの遺跡にまたがって実施しました。これらは愛知郡愛荘町長野・川原地先に所在し、長野遺跡は弥生時代の集落跡、川原・八坂遺跡は平安時代の集落跡として知られています。

遺跡周辺の長野集落には大隴神社があり、この神社は昔は「大領宮・大領堂」とも称されていました。その呼称が古代の郡役所の長官を意味する「大領」に通じるとして、愛知郡を治めた愛知郡衛がこの周辺にあるのではないかとする説があります。また、東部に位置する鯰遺跡からは「郡」と書かれた墨書土器が出土しており、このことから長野周辺は、愛知郡衛との関連性について注目されています。鯰遺跡では他にも渡来集団「依知秦氏」との関係が考えられている大壁建物が検出されています。そして、室町時代になるとこの地域は中山道によって商業が活発化し、繁栄しました。

調査の概要 公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県湖東土木事務所が計画する神郷彦根線補助道路整備事業に伴う発掘調査を令和6年(2024年)4月より実施しました。調査では弥生時代後期の竪穴建物や鎌倉時代の掘立柱建物等を検出し、周辺では当時の土器等が出土しました。平成8~10年度にかけて、今回の調査地の北端部で行われた発掘調査では、集落から主に出土する煮炊きに使われたと考えられる土器やかわらけ等のほかに、「上殿」や「寺」と書かれた奈良時代の墨書土器や転用碗なども出土しています。これは寺院や役所を思わせるものであり、一般的な集落とは異なる役所的性格の建物が付近にあったことが想定されています。

※1…愛知郡を司る役所 ※2…食器用の土器を転用したすずり



今回の調査地と過去の調査地の位置

弥生時代後期 (約 1,900 年前)

この時代の主な遺構は竪穴建物 3 棟です。このうち、最も大きな建物は E 区で見つかったもので、平面形態は一辺が 6.5m を測ります。建物の内部からは多くの弥生土器の甕や高杯の細片が出土し、当時の生活の様子がうかがえました。これまで愛荘町では弥生時代の溝などの遺構は発見されていましたが、竪穴建物が発見されるのは今回が初めてです。また、竪穴建物が見つかった D、E 区は以前同時期の遺構が見つかった地点に隣接しており、今回の調査で弥生時代の集落の範囲が前回調査地の南側にも広がっていたことが分かりました。



竪穴建物① 1 辺 6.5m を測る竪穴建物②(左)と 竪穴建物の構造 それと同時期と思われる竪穴建物③(右) 『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編一』より



土器出土状況 弥生土器 (高杯脚部)

平安時代前期 (約 1,100 ~ 1,200 年前)

この時代の主な遺構は井戸 1 基と溝、小穴です。井戸枠は木で作られており、木材のなかには、元は建築部材などとして使用された後に井戸枠として再利用された「転用材」も含まれていました。

古代の長野遺跡は、「愛知郡衙」の推定地のひとつとして想定されています。今回の調査では、それに直接関連する遺構・遺物は見あたりませんが、今後の調査に期待されます。

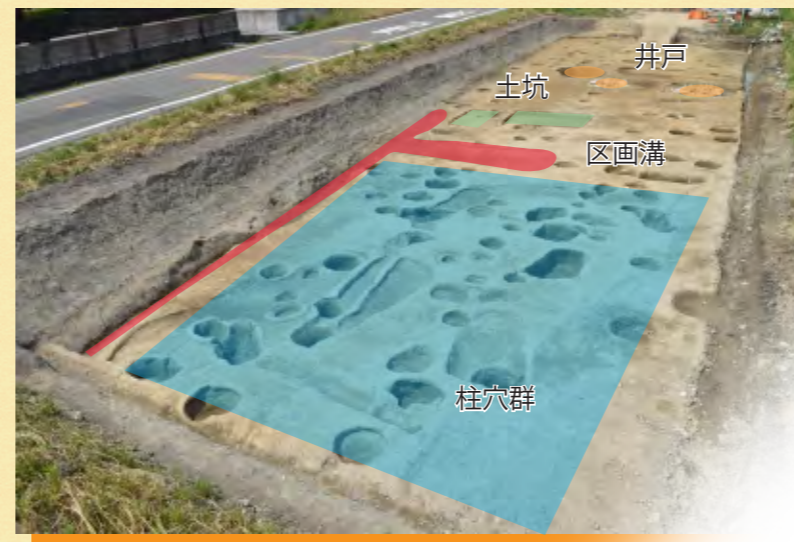


9 世紀の井戸 井戸の底から出土した土師器椀

鎌倉時代 (約 700 ~ 800 年前)



中世集落イメージ図 『守山市誌 (考古学)』より



屋敷地検出状況



井戸 S10



- ① B4区 溝S20
- ② B3区 土坑S6
- ③ A2区 土坑S73
- ④ A1区 小穴S71

- 小穴
- 溝
- 区画溝
- 掘立柱建物
- 土坑
- 井戸



井戸 S86



井戸 S15 の底部に曲物が入っていました。

この時代の主な遺構は鎌倉時代の屋敷地跡です。屋敷地は掘立柱建物、井戸、区画溝の中世の一般的な構成で発見されています。なかでも井戸が多く、石組みの井戸を 5 基、素掘りの井戸を 2 基検出しました。石組みの井戸は使用している石の大きさなど、作り方に少しずつ違いが見られましたが、上部を石で組み、下部に板材や曲物をいれる手法は共通しています。